

タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった

宮沢賢治

青空文庫

ホロタイタネリは、小屋の出口で、でまかせのうたをうたいながら、何か細かくむしつたものを、ばたばたばたばた、棒で叩たたいて居おりました。

「山のうえから、青い藤ふじ蔓つるとつてきた

：西風ゴスケに北風カスケ：

崖がけのうえから、赤い藤蔓とつてきた

：西風ゴスケに北風カスケ：

森のなかから、白い藤蔓とつてきた

：西風ゴスケに北風カスケ：

洞ほらのなかから、黒い藤蔓とつてきた

：西風ゴスケに北風カスケ：

山のうえから、：」

タネリが叩いているものは、冬中かかって凍こおらして、こまかく

裂さいた藤蔓でした。

「山のうえから、青いけむりがふきだした

：西風ゴスケに北風カスケ：

崖のうえから、赤いけむりがふきだした

：西風ゴスケに北風カスケ：

森のなかから、白いけむりがふきだした

：西風ゴスケに北風カスケ：

洞のなかから、黒いけむりがふきだした

…西風ゴスケに北風カスケ…。」

ところがタネリは、もうやめてしまいました。向うの野はらや丘^{おか}が、あんまり立派で明るくて、それにかげろうが、「さあ行こう、さあ行こう。」というように、そこらいちめん、ゆらゆらのぼっているのです。

タネリはどうとう、叩いた蔓を一束^{たば}もって、口でもにちやにちや噛みながら、そつちの方へ飛びだしました。

「森へは、はいつて行くんでないぞ。ながねの下で、白樺^{しらかば}の皮、剥^はいで来よ。」うちのなかから、ホロタイタネリのお母^{つか}さんが云いました。

タネリは、そのときはもう、子鹿^{こじか}のように走りはじめていまし

たので、返事する間もありませんでした。

枯れた草は、黄いろにあかるくひろがつて、どこもかしこも、ごろごろころころがつてみたいくらい、そのはてでは、青ぞらが、つめたくつるつる光っています。タネリは、まるで、早く行つてその青ぞらを少し喰べるのだというふうに走りましました。

タネリの小屋が、兎ぐらいに見えるころ、タネリはやつと走るのがやめて、ふざけたように、口を大きくあきながら、頭をがたがたふりました。それから思い出したように、あの藤蔓を、また五六ぺんにちやにちや噛みました。その足もとに、去年の枯れた萱の穂が、三本倒れて、白くひかつて居りました。タネリは、もがもがつぶやきました。

「こいつらが

ざわざわざわざわ云ったのは、

ちようど昨日のことだった。

なに
何して昨日のことだった？

雪を勘かんじよう定しなければ、

ちようど昨日のことだった。」

ほんとうに、その雪は、まだあちこちのわずかな窪くぼみや、向う

の丘の四本の柏しほんかしわの木の下で、まだらになって残っています。タネ

りは、大きく息をつきながら、まばゆい頭のうえを見ました。そ

こには、小さなすきとおる渦うずま巻きのようなのが、ついついと、

のぼったりおりたりしているのです。タネりは、また口のなか

で、きゆうくつそうに云いました。

「雪のかわりに、これから雨が降るもんだから、

そうら、あんなに、雨の卵ができています。」

そのなめらかな青ぞらには、まだ何か、ちらちらちらちら、網あみになつたり紋もんになつたり、ゆれてるものがありました。タネリは、柔やわらかに噛んだ藤蔓を、いきなりぷつと吐はいてしまつて、こんどは力いっぱい叫さけびました。

「ほう、太陽てんとうの、きものをそらで編んでるぞ

いや、太陽てんとうの、きものを編んでいるだけでない。

そんなら西のゴスケ風だか？

いや、西風ゴスケでない

そんならホースケ、すがる蜂だか？

うんにや、ホースケ、すがる蜂でない

そんなら、トースケ、ひばりだか？

うんにや、トースケ、ひばりでない。」

タネリは、わからなくなっていました。そこで仕方なく、首をまげたまま、また藤蔓を一つまみとって、にちやにちや噛みはじめながら、かれ草をあるいて行きました。向うにはさっきの四本の柏が立っていてつめたい風が吹ふきますと、去年の赤い枯れた葉は、一度にぎらぎら鳴りました。タネリはおもわず、やつと柔らかなりかけた藤蔓を、そこらへふつと吐いてしまつて、その西風のごスケといっしよに、大きな声で云いました。

「おい、柏の木、おいらおまえと遊びに来たよ。遊んでおくれ。」
 この時、風が行ってしまいましたので、柏の木は、もうこそつとも云わなくなりました。

「まだ睡ねてるのか、柏の木、遊びに来たから起きてくれ。」

柏の木が四本とも、やっぱりだまっていますので、タネリは、怒おこつて云いました。

「雪のないとき、ねていると、

西風ゴスケがゆすぶるぞ

ホースケ蜂すがるが巣を食うぞ

トースケひばりが糞くそひるぞ。」

それでも柏は四本とも、やっぱり音をたてませんでした。タネ

りは、こつそり爪立つまだてをして、その一本のそばへ進んで、耳をぴつたり茶いろな幹にあてがって、なかのようすをうかがいました。けれども、中はしんとして、まだ芽も葉もうごきはじめるもようがありませんでした。

「来たしるしだけつけてくよ。」タネりは、さびしそうにひとりでつぶやきながら、そこらの枯れた草穂くさほをつかんで、あちこちに四つ、結び目をこしらえて、やっと安心したように、また藤の蔓をすこし口に入れてあるきだしました。

丘のうしろは、小さな湿地しつちになっていました。そこではまっくろな泥どろが、あたたかに春の湯気を吐き、そのあちこちには青じろい水ばしよう、牛べいごの舌の花が、ぼんやりならんで咲いていました。

タネリは思わず、また藤蔓を吐いてしまつて、勢いきおいよく湿地のへりを低い方へつたわりながら、その牛の舌ベゴの花に、一つずつ舌を出して挨拶あいさつしてあるきました。そらはいよいよ青くひかつて、そこらはしいんと鳴るばかり、タネリはどうとう、たまらなくなつて、「おーい、誰たれか居たかあ。」と叫びました。すると花の列のうしろから、一ぴきの茶いろの墓ひきがえるが、のそのそ這はつてでてきました。タネリは、ぎくつとして立ちどまつてしまいました。それは墓の、這いながらかんがえていることが、まるで遠くで風でもつぶやくように、タネリの耳にきこえてきたのです。

（どうだい、おれの頭のうえは。

いつから、こんな、

ぺらぺら赤い火になつたろう。)

「火なんか燃えてない。」タネリは、こわごわ云いました。藁は、
やつぱりのそのそ這いながら、

(そこらはみんな、桃ももいろをした木き耳みみだ。

ぜんたい、いつから、

こんなにぺらぺらしだしたのだろう。)といつています。タ
ネリは、俄にわかにこわくなって、いちもくさんに遁にげ出しました。

しばらく走つて、やっと気がついてとまってみると、すぐ目の
前に、四本の栗くりが立っていて、その一本の梢こずえには、黄金きんいろをし
た、やどり木の立派なまりがついていました。タネリは、やどり
木に何か云おうとしましたが、あんまり走つて、胸がどかどかふ

いごのようで、どうしてもものが云えませんでした。早く息をみんな吐いてしまおうと思つて、青ぞらへ高く、ほうと叫んでも、まだなおりませんでした。藤蔓を一つまみ囓んでみても、まだなおりませんでした。そこでこんどはふつと吐き出してみましたら、ようやく叫べるようになりました。

「栗の木 死んだ、何して死んだ、

子どもにあたまを食われて死んだ。」

すると上の方で、やどりぎが、ちらつと笑つたようでした。タネリは、面白おもしろがつて節をつけてまた叫びました。

「栗の木食つて 栗の木死んで

かけすが食つて 子どもが死んで

夜鷹よだかが食つて　　かけすが死んで

鷹は高くへ飛んでつた。」

やどりぎが、上でべそをかけたようなので、タネリは高く笑いました。けれども、その笑い声が、潰つぶれたように丘へひびいて、それから遠くへ消えたとき、タネリは、しよんぼりしてしましました。そしてさびしそうに、また藤の蔓を一つまみとつて、にちやにちやと噛みはじめました。

その時、向うの丘の上を、一疋ひきの大きな白い鳥が、日を遮さえぎつて飛びたちました。はねのうらは桃いろにきらきらひかり、まるで鳥の王さまでもいうふう、タネリの胸は、まるで、酒でいっぱいぱいのようになりました。タネリは、いま噛んだばかりの藤蔓を、

勢よく草に吐いて高く叫びました。

「おまえは鴝とぎという鳥かい。」

鳥は、あたりまえさというように、ゆつくり丘の向うへ飛んで、まもなく見えなくなりました。タネリは、まつしぐらに丘をかけたのぼつて、見えなくなつた鳥を追いかけました。丘の頂上に来て見ますと、鳥は、下の小さな谷間の、枯れた蘆あしのなかへ、いま飛び込むところでした。タネリは、北風カスケより速く、丘を馳かけ下りて、その黄いろな蘆むらのまわりを、ぐるぐるまわりながら叫びました。

「おおい、鴝、

おいらはひとりなんだから、

おまえはおいらと遊んでおくれ。

おいらはひとりなんだから。」

鳥は、ついておいでというように、蘆のなかから飛びだして、南の青いそらの板に、射られた矢のようになかけあがりました。タネリは、青い影法師かげぼうしといっしよに、ふらふらそれを追いました。かたくりの花は、その足もとで、たびたびゆらゆら燃えまじましたし、空はぐらぐらゆれました。鳥は俄かに羽をすぼめて、石ころみたいに、枯草の中に落ちては、またまっすぐに飛びあがります。タネリも、つまずいて倒れてはまた起きあがって追いかけてました。鳥ははるか西そに外れて、青じろく光りながら飛んで行きます。タネリは、一つの丘をかけあがって、ころぶようにまたかけ下り

ました。そこは、ゆるやかな野原になっていて、向うは、ひどく暗いおお巨きな木立でした。鳥は、まっすぐにその森の中に落ち込みました。タネリは、胸をおき押えて、立ちどまってしまいました。向うの木立が、あんまり暗くて、それに何の木かわからないのです。ひばよりも暗く、櫃かやよりももつと陰気で、なかには、どんなものがかくれているか知れませんでした。それに、何かきたいな怒鳴どなりや叫びが、中から聞えて来るのです。タネリは、いつでも遁にげられるように、半分うしろを向いて、片足を出しながら、こわごわそつちへ叫んで見ました。

「鴝、鴝、おいらとあそんでおくれ。」

「えい、うるさい、すきなくらいそこらであそんでけ。」たしか

にさつきの鳥でないちがったものが、そんな工合ぐあいにへんじしたの
でした。

「鴝、鴝、だから出てきておくれ。」

「えい、うるさいったら。ひとりでそこらであそんでけ。」

「鴝、鴝、おいらはもう行くよ。」

「行くのかい。さよなら、えい、畜生ちくしよう、その骨汁ほねじるは、空虚から

だったのか。」

タネリは、ほんとうにさびしくなつて、また藤ふじの蔓つるを一つまみ、
噛かみながら、もいちど森を見ましたら、いつの間にか森の前に、
顔かほの大きな犬神いぬがみみたいなものが、片かたつ方の手をふところに入れて、
山梨やまなしのような赤い眼めをきよろきよろさせながら、じつと立つて

いるのでした。タネリは、まるで小さくなつて、一目さんに遁げだしました。そしていなずまのようにつづけぎまに丘を四つ越えしました。そこに四本の栗の木が立つて、その一本の梢には、立派なやどりぎのまりがついていました。それはさっきのやどりぎでした。いかにもタネリをばかにしたように、上できらきらひかっています。タネリは工合のわるいのごまかして、

「栗の木、起きろ。」と云いながら、うちの方へあるきだしました。日はもう、よつぽど西にかたよつて、丘には陰影かげもできませんでした。かたくりの花はゆらゆらと燃え、その葉の上には、いろいろな黒いもようが、次から次と、出てきては消え、でてきては消えています。タネリは低く読みました。

「太陽は、

丘の髪の毛の向うのほうへ、

かくれて行ってまたのぼる。

そしてかくれてまたのぼる。」

タネリは、つかれ切つて、まっすぐにじぶんのうちへもどつて
来ました。

「白樺しらかばの皮、剥はがして来たか。」タネリがうちに着いたとき、
タネリのお母つかさんが、小屋の前で、こならの実を搗つかきながら云い
ました。

「うんにや。」タネリは、首をちぢめて答えました。

「藤蔓みんな噛かじつて来たか。」

「うんにや、どこかへ無くしてしまつたよ。」タネリがぼんやり答へました。

「仕事に藤蔓噛みに行つて、無くしてくるものあるんだか。今年はおいら、おまえのきものは、一つも編んでやらないぞ。」お母^{っか}さんが少し怒つて云いました。

「うん。けれどもおいら、一日噛んでいたようだったよ。」
タネリが、ぼんやりまた云いました。

「そうか。そんだらいい。」お母^{っか}さんは、タネリの顔付きを見て、安心したように、またこならの実を搗きはじめました。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

底本の親本：「新修宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：久保格

校正：鈴木厚司

2003年8月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 ([http://www.aozora.gr.jp/](http://www.w.aozora.gr.jp/)) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

タネりはたしかにいちにち囓んでいたようだった
宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>